特240
146

日本人の神

トツレフンパ報新音福

基督者は日本の神道を如何に觀るか

増補第三版

福音新報社發行

始

特240
146

日本人の神

福音新報社發行

第三版發行に就て

本書第二版は疾く品切れ、其後内容を増補改纂し度く思ひしも、他用に妨げられ其儘約半歳を經過したるに、此程日本基督教聯盟常議員會に於ける『神社問題に就て』の懇談會に列し、又同聯盟總會に出席し、海老名、小崎兩老並に諸師先輩の『社會情勢と基督教』に關する意見の交換に於て神社問題中心となり日本神道の神觀などにも言及せられたる點多かりしに促がされ、繼に増補して玆に第三版を發行する事となる。諸師諸先輩始め大方諸教兄の叱正を乞ふ。

一九三六年十一月十五日

著者

此のパンフレットは曩に福音新報に連載せるもの、友の勸めにより刊行する事になりました、此種の問題に意を用ひ居られる方々の御一讀を乞ひ御叱正を願ふ

著者

目次

一 序説　大日本は神國也＝『光は東方より』の豫言
二 神道の古典　古事記と日本紀＝『於高天原有神矣』
三 神道最初の神學書　神道五部書＝佛、儒の思想的影響
四 神道の諸說　三位一體論＝彼斯僧季密譬
五 復古神道　古言『カミ』の語意＝神の本實『隱身』
六 明治以後の神道論　新しい光＝『基督教日本神學』
七 唯一神觀と神代の諸神　現身神と神子受肉の思想
八 神道と儒教及老子　神道に於ける天啓思想
九 神ながらの道と先王之道　神道は現世主義現實主義
十 祭神の古道へ　『世々隱れたる神の奥儀の經綸』

日本人の神

原　戊吉著

一　序說

＝大日本は神國也＝『光は東方より』の豫言

イスラエル民族は『神の選民』と稱し誇つた。大和民族は『日本は神國なり』と稱し誇つた神皇正統記の開卷第一に、『大日本は神國也』とあるのが、最初ではないが、最も深く國民に印象を與へた一語である。それから七八十年後の作と見られて居る神道由來記、これは吉田神道の傑物吉田兼倶が、足利義敎時代に、先祖兼直の名に託して世に出した僞作物との定評ではあるが、同書に『我國は天地と俱に神靈顯はれます、故に國を神國と云ひ道を神道と云ふ』と言つて居るのは、日本は人間のさかしらな智惠の政治によりて治められて居る國とは國柄が違ふ、神の治め給ふ神ながらその儘の國であると云ふ意味をヨリ鮮明に宣言したものと謂つてよい。

眞の意味に於ける『神國』『神道』を完ふすることは、大和民族の最高の理想であり最高の使命であらねばならぬ。

然らば其の『神國』と云ひ『神道』と云ふ思想の第一對象となるべき『神』とは何んな神を云ふのか。

日本人の神觀念は、外來の思想—儒教や、道教や、佛教や、陰陽道などの影響を受けて、其の神學を組織し、其の内容を整へ豐にした點は見逃せないが、又それが爲め他の一面には多くの不純なものが交つて來て、或はあらぬ方面に進轉したと思はれる節もある。曾て故植村先生が、日本の神道は支那印度の思想に禍せられ、正しき進歩の道を曲げられたと言はれたことを記憶する。神道が本來の面目を歪められ、儒教化し、道教化し、佛教化したことに氣付いて起つたのが德川時代の復古神道であらう。されど殘念な事には、復古神道とても、矢張時代思想の一所産に過ぎなかつた。其の根本に反つて正しき神觀念より出直すには、最早餘りにも歴史と有合せの傳統思想の感化と影響を受けて居たと言ふの外はない。

天孫民族の高天原から持つて來た神觀念は、後世作り上げられた『神』よりはヨリ純な直覺

意識の所産ではなかつたのか。後世吉田神道の學者が、『神とは常の神に非ず』と言つたのは、老子の『道とは常の道に非ず』の口調を眞似たものではあるが、然し本統の『神』と云ふのは、當時世間で拜んで居た樣なそんな神ではない本居宣長の所謂『鳥なるもあり虫なるもあり』と云つた樣なそんなんぢやない、されば正しき神觀念に返へらねばならぬと云ふのである。これは吉田神道家などの言ひ得べき語でなく、實に我等基督者にして言ひ得べき語、又言ふべき語であらねばならぬ。

されば、大和民族本來の神觀念が、正しく發展し成長したなら、イエスによりて啓示された眞の神觀念を受け納れ得る豐な準備地となり、所謂『地の界を定め』神を探り尋ねて、其の舊約たる國民歴史の意義を完ふし得たのではなかつたかと思はれる。今日以後でも其の不純なるものを漸次純化して、其の正しきに返へせば、『國は神國』の意義を完ふし、其の國民的理想を成就し得るのであらう。

我民族の神觀念を正しきに引返し、其の思想信仰を豐にせば、爰に東洋的な別な思想に由り基督教の新なる方面の眞理を開拓し、今日の基督教をして更に深からしめ、更に豐ならしめ、

神の大御心の更に大なる經綸を知るの役目を爲すことであらうと信ずる。斯くして『光は東方より』の豫言を實にするであらうことを信ずる。

これが、私をして本文を草せしむるに至つた理由で、又一には『所謂日本精神』の檢討せられ發揚せられつゝある時代風潮にも刺戟せられ、且つ此の問題は『日本精神』にも又國體問題にも深い關係を有して居る點からも重要性を有して居る事を信ずるからでもある。

二　神道の古典

＝古事記と日本紀＝『於二高天原一有レ神矣』＝

所謂『皇道』と謂ひ、『神ながらの道』と謂ふのも要するに宇宙の主宰神たる天津大御神の大御心を謂ふに外ならんと信ずる。社會發達の幼稚な揩壇に於ける一民族神を對象とし中心としたチッポケな思想の產物であつてはならぬ、從つて日本民族の信仰の對象は結局歸着する所、天地主宰の唯一神であらねばならぬ。

爰に、此の一文の筆を進むるに當つて、先づ古典の一句を引用する。

『高天原に所生ます神の名を天御中主尊と曰ふ』

これは日本書紀の天地開闢を舒した本文外の『一書曰く』の一文である。平田篤胤は此『所生ます』を『有ます』と解釋して居る。開闢と共に生れませる者でなくして、天地創造の太初に既に存在して居た永遠の神と解して居る。『有りて在る者』、之が吾等の祖先の直覺的根本の宗教意識ではなかつたか。

神道には、儒教に於ける五經も無ければ、佛教に於ける經論もなく、基督教に於ける聖書もない、古事記と、日本書紀とを神道の典據として居る、されどこれは經典でなくして、國民歷史の記錄である。而もこの記錄たるや、神話とも、寓話とも、譬喩談とも見られ得る性質のもので、解釋の仕樣によりては爰に支那の思想、印度の思想とも一致し得られる丈けの廣さがあり、不徹底さがあり、捕捉し難い漠然さがある。

されど、日本民族の神觀を繹ぬるには、先づ古事記、日本書記、古語拾遺などの古典に據る

の外はないことは言ふまでもない。而も古事記にしてさへも、實は支那の思想學問の影響を受けた遙か後代の所作にして、眞の古傳を其の儘にと苦心したものなるに拘はらず、無意識的に支那の影響を受けた事は察し得られる、況んや漢文を以て作られた日本書紀に於ておやである。されど前掲の一句に吾等は漢意の中に蔽はれた眞の古傳を見出し得ることを信ずる者である。

古事記と日本書紀の出來たのは、神武天皇即位一三七〇年から八〇年頃である。尤も日本の年代には、六百年の相違があると或る學者等は主張する。然しそれは餘談なれば此所には言はないことにする。

古事記は、古傳を其のまゝ口述したものを、國語で綴つた記錄であるから眞實を傳へて居ると云ひ、日本書紀は、漢意即ち支那の思想文章によりて、事實を飾り曲げて居ると云ふので、古事記を揚げて日本書紀を貶す學者もある。本居宣長の如きそれである。宣長と云ふよりは古學派の人々はそれである。古學派の盛になるまでは日本書紀が神道の基本典籍となつて居たものである。古學流行後にも、日本書紀は國の公けの編纂であると云ふので古事記の上に置く學者もある。

併し、古事記、日本書紀の出來た時代には支那の學問が日本に行渡つた頃で、王仁が論語、千字文を齎し來た後四百五十年を經て居る、王仁來朝前少くも三百年漢土との交通はあつたと見られて居るから、古事記にしても古學派の人々の所謂漢意が雜つて居ることは免がれぬ。第一其の序文を書いた編纂者太の安麿の思想が、既に漢意タツプリであるから、古事記も自然其の影響を受けて居ることは察するに難くないと云ふことを先づ言つて置く必要がある。

古事記と日本書紀の天地創造の記事は相違して居る。古事記には

「天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神、次に高御產巢日神、次に神產巢日神。」

とある。天地創造と同時に神が出來たものと解せられもする。又斯く解すべきことを强く主張する學者もある。されど或學者（美甘政和）の言つた樣に『神は無始なれども天地初發の時を始めとして傳へるに妨げなし』と解し、天地に先つて神は存在して居たと解するのが正しからう。本居宣長も古事記傳に『此神達は天地よりも先つて成りましつれば、天地の成ることは此の次にあれば此の神達の成りませるはそれより先なるを知るべし』と言ひ平田篤胤も古史傳

に『天地未生之時於二高天原一有レ神矣』と記し、飯田武郷も同樣に解して居る。すつと古い所では『天口事書』（此書は舒明天皇四年に度會大神主調査寫之と記し其下に、「神代秘書十二卷之內最極秘書」と銘を打つてあるが、舒明時代よりはズウト後に出來た書であらうとの事）にも『天御中主尊は、宗なく上無く、獨能く化る故に天帝の神と曰ふ』とあるが如き、即ち天御中主神は、天地に先つて存在する無始の神であると云ふのは此の古事記の開卷第一に於ける神觀の說明と見てよい。此の文よりもモット簡明なのは前章に引用した書紀の一書に『高天原所生（アレマス）神名曰二天御中主尊一』の一句である。是が寧ろ眞實の古傳ではないかと思ふ。此の簡明な古傳を取らずに、稍々漢意に曲げられた嫌のある『初發の時』なる准南子もどきの文句の挾まれた事は、古事記さへも漢意の影響を蒙つて居るのでないのかとの疑を抱く。

日本書紀に至つては全然漢意を以て記錄せられて居ると云ふのは本統である。春秋緯書三五曆記や、准南子の天地創造說を持つて來て、而して『天先つ成りて地後に定まる、然る後神其中に生れ給ふ』とある。此の思想は、德川時代に於ける太極理氣說を唱へた朱子學の本尊林羅山の『神道傳授』の中にも現はれて居る、『神は形なしと雖靈あり氣のなす故也、神を生する

ゆはれは卽ち是れ理也』、理、神に先つ、神卽ち理の思想ではない。尤も日本書紀は天上の神の事には觸れず、所謂五別天神には筆を着けずに、國土現出後より筆を起したので、天地別れて後の出現神國常立神より說き始めたるものなれば必しも古事記とは矛盾はしないと說明の仕樣もあらう、そう云風に說明して居る學者もある。

三　神道最初の神學書

＝神道五部書＝佛、儒の思想的影響＝

其所で、前述の如く、神道には經書がない。復た神道家のよく言ふ樣に『敎』や儀文の『道』ではなく、神代生活の事實其のものであると云ふのであるが、『神道』と云ふ文字の初めて出たのは、日本紀廿一卷、用明天皇紀中に、『天皇佛敎を信じ神道を尊む』とあるに始まる。勿論思想の體系を具へた『神道』と云ふものが、玆に出來たのではない。此點に於て太宰春臺が

神道など云ふものは日本の古代に無かつたものぢや。と言つたのは一面の道理がある。されば五代後の孝德天皇大化の詔勅中に註して、『惟神とは神道に隨ふて亦自ら神道有るを謂ふ也』との文句がある。これはよく引かれる文句だが、或る學者は此の註は無くもがなで、意味を爲さぬ文句だとけなすのである。されど不明瞭の間に自ら神道思想の匂ひと色とを受け取り得られる文句である。組織せられた思想の體系はないが、然し大古神より承け繼いた生活そのものの中に自ら神道なるものがあるものと解すればよいのである。

そこで此の『神道』なるものを哲學化し論理的に體系化せんとした最初のものは神道五部書なるものであらう。

神道五部書なるものは、一言に曰へば伊勢大神宮の緣起を書いたものであるが、其目的とする所は、內宮に對抗して外宮の地位を引上げんとしたもので、外宮神官の作意によれる僞書と云ふのが學者の定說の樣であるが、外宮の豊受大神を天御中主神だとして內宮の天照皇大神に對せしめたもので、其の內容は、御中主神の絕對神性を說いた神道の重要な神學が述べられて居る。其の僞書たることは、德川時代に吉見幸和の著『神道五部書辯』により素破拔かれたのに始まるのであるが、僞作であるにしても無いにしても、最初の神道神學書であること丈けは間違ひはあるまい。吉見の高等批評の出るそれ迄は、神道の根本敎義は同書に秘められたものとして取扱はれ、德川時代復古神道の起るまでの各派神道は、皆この感化を受けて居ないものは無いと謂つてよい。舊約聖書モーゼの五書と謂つた樣な地位を占めて居たものである。神皇正統記の北畠親房にしても、足利時代『日本書紀神代口訣』の著者忌部正通にしても、德川時代の山崎闇齋に至るまで皆然りで、闇齋の『垂加神道』の名は五部書中の一書、倭姫尊世紀所載『神垂以二祈禱一爲レ先、冥加以二正直一爲レ本』の句より取り來つたものである。

五部書の神學は屏二佛法息一と言つて、佛を排斥しては居るが其の實、易經と老子と五行說と佛敎の思想論理を藉り來つて、神道なるものに哲學付けたものと謂つてよい。勿論それまでは神道なるものは、單なる直觀的宗敎意識に過ぎずしてそれを說明する丈けの思想、表現する丈けの語彙を有して居なかつたので、印度や支那の文化の齎らした思想により、自己直觀の宗敎意識を說明せんとするに到りたるのは當然の事であらねばならぬ。斯くして印度や支那の思想に對抗して、神道を論理的に擁護せんと努力苦心したのが神道の其の思想體系を作り始めた動

機であつたらう。

此の時代には隨、唐の文化と佛教の高遠な論理が思想界を壓倒風靡して居つて、社會の支配階級、インテリ連中は、漢に非ずんば竺、儒に非ずんば佛と云つた風で、何等の思想體系を有せない神道は、儒佛に對抗する丈けの武器がなかつたのである。從つて之に對抗する丈けの思想、卽ち哲學が組織せられねばならぬ事情に迫まられ、彼等は僞書に託しても儒、佛と相駢んで既に斯くした哲學を有ち、斯くした思想を有して居たと云ふことを世間に示さねばならなかつたと察し得られる。これが、古き秘錄傳統に名を藉りて僞書を持ち出すに至つた事情であつたらうことが察し得られる。

神道五部書中の一書『豐受皇太神鎭座本記』に曰く、

『天地未だ剖れざる以前之を混沌と名く、萬物の靈を封して虛空神と名づけ又大元神と云ふ、虛にして靈、一にして體なし。』

宇宙には大元の神がある。唯一にして靈體であると云ふのである。一體神道では――少くも後世の神道では所謂『八百萬神』を認めて居るが、斯く唯一の大元神を認める點から見ると、

神道なるものは唯一神敎である。八百萬神を拜する點から見ると多神敎である。又一部の或學者の樣に、八百萬神は統一神の、物象に於ける表現に過ぎぬ、其表現した物象によりて本元の神を認めると云ふ風に說明すると、如何にも汎神敎の匂がする。又先頃兎も角評判となつて居たメイソン氏の樣に、宇宙全體それ自身神靈であると云ふ說明、メイソンと云ふ人は自己の哲學に元來が捕捉し難い神道を押し嵌めたのに過ぎないので、神道の說明でなくして、神道を用ち來つて、メイソン哲學を說いたものと見た方が本統かも知れない。ヘーゲル派に言はすと、『萬有は、空間に於けるイデアの發展で、歷史は、時間に於けるイデアの發展である』と云ふ事になるが、このイデアなるものを唯一神と說明することも出來れば、メイソンの樣に萬有は此のイデヤの創造的進化であるとも見られ得る。基督敎にしてもヘブル書記者の『凡ての物に充つる神』と云ふ思想と唯一超越神の思想とは矛盾はしない。本統言へば、神は絕對無限であるから、『唯一』と云ふ言葉によりて、其の內容を制限せられ得る神ではない。唯一の超越神であると共に又在さゞる所なく、萬物何所にも充ちて滿てる神であらねばならぬ。萬物に充てると云ふ方面のみから見れば、基督敎の說く神にも亦汎神敎的の神の姿を見得るのである。

四神道の諸說

＝三位一體論＝彼斯僧季密醫＝

神道五部書の後に、伊勢の神官渡會家行の『類聚神祇本源』だの、北畠親房の元々集など、儒、佛、老、陰陽道によりて一層體系化して哲學的說明を爲したものであるが、其の神觀は種々の思想を混線せしめてはつきりしない點がある。

親房から一寸遲れて世に出た忌部正通の『日本書紀神代口訣』によれば

一、天御中主神は明理の本源で永遠に高天原に居ませる神

一、高皇產靈神は萬物を化生する創造神

一、神產靈神は靈を以て萬物に內在する神

一、以上三神一體である。

爰に明に三位一體の一神說が現はれて來た。尋て來た有名な學者一條兼良の如きも、高天原三一神說を唱へて居るが、忌部正通は老子の『道一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ三、萬物を生ず』と云ふ說と、易の大極說から考へ出したものかも知れぬ。或はネストリアン派の基督敎の感化にあらずとも斷言は出來ぬ。何となれば、聖武天皇の天平勝寶年代に波斯の僧季密醫が來朝したと國史に見ゆるのは、蓋し醫術の心得あるネストリアンの宣敎師であつたことが察せられる。波斯はネストリアンの總本山の在る所で、唐ではネストリアンの會堂を初めには波斯寺と稱して居た、其後弘法大師が入唐した時、ネストリアンは唐に榮えて居たが、弘法の宿して居た長安の西明寺には印度僧般若三藏が居り、弘法はそれに私淑して居た、所が般若三藏とネストリアンの宣敎師淨景アタムとは親密な間柄であつたので、弘法は自然アダムに時々會ふて其のネストリアンの敎義を聽いたことは言ふまでもあるまい。斯うした關係からネストリアンの思想的感化が神道の上にも傳はつて居ないとは誰が言ひ得よう。それとも古典によりて御中主、兩產靈の神の一體觀から考へ出したのか、思想の系統は明でないが、之は日本神道に取つて極めて重要な神觀であらねばならぬ。兼良は印度思想に影響せらるゝ所多く、ブラマ梵天王思想であつたと見える。

神道五部書の本家本元である社家神道卽ち伊勢神道は、德川時代になつて渡會延佳と云ふ學

者が出て、外宮神豐受大神卽ち天御中主神卽ち國常立尊は、支那の易經に說く『極』にして萬物の大元であると言つたが、五部書の神觀以上には發展しなかつた。五部書の神觀は渡會延佳に學んだ有名な山崎闇齋に依て更に詳說祖述せられた。闇齋は佛僧であつて朱子學に移つた人で、本居宣長に言はせると『神典を籍つて儒道を說く者、安んぞそれ神道たるあらんや』とけなした通り、宋學の大極理氣說から神を說明し理氣一體の大極こそ宇宙の本體根源で、天地の間に唯一の活動せる妙用の一元氣、之れ卽ち國常立尊卽ち天御中主神である、卽ち理にして、理は一なるが故に神亦一なり、一なるが故に恒久不變、至善至純、造化の元神であると說明した。

闇齋は宋學理氣說の無神的思想に滿足せず、宣長も言つた樣に『支那の神と云ふものは只空しき理のみで確に其物あるにあらず』と爲し、其の理氣說の哲學的理論を押し詰めて、天地の本體に人格神を見出したのか、彼の神學である。宋學の理氣說なるものは、元來人格的本體を認めた太古の支那思想より墮落した無神哲學である、支那太古の『天』の思想は、人格神を認めた有神說であつたことは明である。

闇齋の弟子であつた玉木政英も、忌部正通と同樣に、天御主神は大元の靈にして永遠に高天原に在す神、高皇產靈神は萬物を化生せしむる神、神產靈神は靈を降して生物の魂を爲す神なりと言ひ三卽一理の三位一體論を唱へた。

伊勢神道と並んで早くより神學を組織して居たものに、唯一神道又は吉田神道或は卜部神道なるものがある、吉田神道の大成者、大成者と云ふよりも寧ろ組織者に吉田兼倶と云ふ傑物があつた。足利義政時代の人であるが、其の主張によると、吉田神道は太古神事を司り天照大神の隱れました時、天の窟戸の前で祝詞(ノリト)を奏した天兒屋根尊より相傳せるものだと唱へて、『元本宗源神道』と稱し、我が神道こそ、神明の直傳で、一氣の元水を汲んで佛儒老『三敎の一滴を嘗めず』、他と習合しない純一無雜の密意で、『天地を書籍とし、日月を證明と爲す』と誇稱して居るが、其實太宰春臺の評した樣に、佛七八分、儒二三分を配劃して造り上げ、中にも眞言宗を多分に取入れて居る、其の神學書に『唯一神道名法要集』『神道由來記』がある。共に先祖の名を藉りて兼倶の僞作に係るものだと大體相場が定まつて居るが、兎も角、足利時代に組織せられた神學書で、物徂徠などは神道なるものは上代にはなかつたものを卜部兼倶が作

つたものである』とまで言つたもので、神道には相當の權威を有して來たのであるが、其の神觀によると

神とは天地に先てる神にして、天地の根元、萬物の起源、靈宗で、無形にして形、無名にして名、靈體で、虛無大元尊神である。此の大元より大千世界は生ず。

唯一神敎的思想は豐に現はれて居るが此處には三位一體說は見えぬ。

神道各派の中に、伯家神道と云ふのがある。これは神祇官の總元締であつて、華山天皇の皇孫延信王より代々神祇官の長官であり朝廷の祭祇の事を掌つて居た。伊勢神道や吉田神道が其の神學を宣傳した當時にも別に學說を立てゝ世間へ打つて出ようと云つた樣な事はなく、昔からの所傳により秘密傳授を以て自家を守つて居たのであるが、德川時代になつて、下位に立つて居た吉田家が羽翼を伸ばし勢力を張り、天下を二分して其の一半を保つと云つた樣な形勢となり、其他の各派神道も勃興するに至り、時代の大勢に押されて其の神道說を唱道宣傳する樣になつた。德川文化の盛り實永の頃に出た『神道通國辯義』や、『神祇伯家學則』に於て其の神學說を見得るのである。其の神觀によると

一、天地に先つて天御中主神、高皇產靈神、神產靈神が無始より天の最中に座し、爲すことなくして爲し給ふ、所謂無爲の神德より造化の首を造り給ふた。

一、天御中主神は理中の理、萬物の本源萬物此の理によらざるはなし。

一、高御產靈神は萬氣の元、運行の主、此神の命令によりて神の業を運行する。

一、神產靈神は萬質の元である。

此の三即ち一理、此の造化によりて陰陽の祖、伊邪那岐伊邪那美の二神、無形の神から血肉を具ふる實體の形を現はすに至たれるは理氣形質の變化である。

以上が伯家神道の唱ふる神觀の大要である。

伊邪那岐伊邪那美二神が、無形の神即ち阿夜訶志古泥（アヤカシコネ）神から產まれて有形の人體となつたと云ふ點に於て、江戸の神道家吉川惟足も亦、大極理氣說から天御中主神は極にして造化大元の靈、それより陰陽二神即ち那岐那美の二神生れ給ふ之れ人體の神であると說く、（玉木政美も那岐那美兩神を人の始めと爲す）神即ち無形の靈なる神から有形の人が產れたと云ふことは、アダム、エバに於ける舊約聖書のみでなく、日本の思想に於ても何の不思議もない事であつた

之に疑惑を抱く樣になつたのは西洋の唯物理學の輸入せられてから著しくなつた。

以上の神道神學は、要するに易の太極說や、陰陽說や、宋儒の理氣說や、老子の說を骨子として、組織したものであると謂つてよい。但し『極』と云ひ『理』と云ひ『道』と云ふのは抽象名に過ぎぬ。そこで此の論理を人格神を中心とせる信仰に適用し、其の『極』なるもの、『理』なるもの、『道』なるものが事實となつて顯現したと云ふのが神道の神である。『天御中主神』がそれである。

五　復古神道

＝古言『カミ』の語意＝神の本質『隱身』＝

神道を前述の如く支那の、異國の思想を以て說明し解釋する事が鼻につき癪に觸つて堪まらず又一つには國民的自尊心から一種の反抗氣も手傳つたかとも想はれるが、日本には抑々日本の道がある、何も支那から異國の學問や思想を借りて來て小慧しき理窟を並べる要はない、是れ決して神道の眞面目では無い、是れ『神道』の名を藉つて異國の道を述べるものであると言つた樣な主張から、新に興つたのが德川時代に於ける『復古神道』である。

支那では朱子學から新に目を覺ました王陽明の古學が興り、日本でも同じく當時官學であつた朱子學に反對して起つた伊藤仁齋や荻生徂徠等が、古學へと目を着けた同じ風潮が同時に我神道界にも起つた譯である。

從來の神道は佛、老、儒の變形であると言つた復古神道家の言は、仁齋や徂徠の儒家古學派の儒道に關して言ふ所と符節を合するの主張である。古學派は、朱子學を以て老子や佛者の說で曲げられたもので本來の儒道ではないと唱へた。徂徠が古語古文の字義を明にして故意を繹ねたのは、復古神道の源流となつた契沖や眞淵等が、萬葉集研究を以て古語により古意を知る根本研究であるとしたのと同筆法、同一轍の步み方である。

そこで、是迄餘り問題とならなかつた『カミ』と云ふ言葉の詮索が盛となつたのである。『カミ』の解釋は學者の諸說まち〳〵である。一番多數說で又流れ下かつた後世の神體拜の實

際に當て嵌つたのは『上』と同意義であるとの說である。されどこれは流れ崩れた後の神觀念の事實に賴つた嫌があつて、本來の神觀念にひたと添はない憾がある。北點では篤胤や契沖やスツト溯つて忌部正通等の本質論的の說明に根據の深い所はありはしないかと思はれる。されどこの人々の『カミ』の解釋は彼等の神看念の主觀に支配せられて居る嫌もないではない。

そこで神の性能本質に鑑み、古典に根據を有せる說に、『カミ』は隱身の略語であると云ふ解釋がある、最近出版せられた大槻博士の『大言海』も此說を取つて居る。宣長の弟子の齋藤彥麿や、近代では城秀成、八田知紀、飯田武鄕、南里有隣なども此の說を取る、古典にある『身を隱し給ひき』に根據するものであつて、『現身』に對する『隱身』の意、平田篤胤の所謂、靈體の存在者と云ふ義で、古代には『現事』、『顯露事』に對する、『神事』『幽事』の思想がハツキリして居て、現世生活は天皇の支配し司り給ふ所、幽事即ち靈界は神の支配し司り給ふ所との思想である。即ち『カミ』とは『獨り神なりまして身を隱し給ふ』た靈なる存在者であると云ふ意味である。神は靈なりと云ふ此の言葉の意味が、伊勢神道でも、唯一神道でも、伯家神道でも神の屬性として認めて居る所と合致して居る。『カミ』を『上』と同一義と解する事は

神觀念の墮落を物語るもので、決して元始大和民族の神念觀の眞に徹したものではあるまい。

或る研究者は、日本の神典思想では天御中主神は宇宙の主宰神であることは認めて居るが、併し古代の日本人は注意を此神には向けなかつた、從て今日迄も天御中主神を祭つた神社は無いと云ふのである。天御中主神を祭つた神社は絕對にないとは言へない樣だが、重きを置いたのは寧しろ直接萬物創造の業に當られた宇宙の生產神、產靈の神ではなかつたのか、『萬物これに由りて成り、成りたるもの一として之によらで成りたるはなし』（約傳第一章）との產靈神、これが、初代大和民族の禮拜の對象であつたかも知れない。彼等は天津磐境や天津神籬を造りイスラエル人の如く石の祭壇を築き或は常盤木を植廻らして此所に神を拜したのではなかつたのか。彼等は宇宙の神靈は、死せる『太極』や、『理』や、『道』やにあらずして、萬物に表現して居る其の生命の本源たる大生命であると爲して之を崇め、天地中心の一主神を認めざるにあらざるも其中に直接萬物を造れる造化神たる產靈神の存することに特に心を動かしたのではないか。國學者渡邊玄包氏の說によれば、延喜の朝に神名帳を製せらるゝまでは決して人皇以後の人の死したる其の靈を祭神としたるものなし、延喜式外に於ける北野天滿宮の如き、御

靈會の如きは其の時代に特に起れる變例のみと云へり。さるにても人を祭れる莊大なる神社は多けれども天地の主宰神日本神道の中心神たる天御中主神を祭れる大神殿を見ることの無きを不思議と思はざるを得ないのである。

復古神道家の連中は、神道なるものを何う云ふ風に復古せしめんとしたのか、そして彼等の主張及その以後の神道が何う云ふ風に發展したのか、爰に先づ彼等の神觀を繹ねてみよう。

加茂眞淵は專ら萬葉集の研究によりて古意を繹ねんとしたが、其の神學的思想は自然哲學、寧ろ無神說に近い。本居宣長は神觀念の根柢に哲學的基礎が弱いので、神とは、斯くあるべき筈のものであるとの主張はなく、單に歷史上の信仰對象を見て、勝れたる者は皆神と謂ふと云つた樣な定義を下すに至つた所から見ると多神敎に立つて居る樣にもあり、又善惡二元論を唱へる樣でもあるが、天御中主神は、天地の成るに先つて存在せる神なることは之を認めて。此の天地を始め萬物悉く皆高、神兩『產巢日の大御神の御產靈(ムスビ)によりて成り出づるものなり』とは言つて居るが彼の神觀ははッきりしない。

平田篤胤に至つては博學多識、儒にも佛にも縱橫に當り散らし、暴露政策さへも用ひて居るが多神敎的な迷信も可なり彼を取纏ふて居る。されど天御中主の神を、人格的宇宙の主宰神であると云ふ根本的神觀の上に立つて居る事丈けは明に認め得られる。彼の咏した和歌に『玉襁かけて祈らな世々の祖(オヤ)おやの御祖の神の幸(チハ)ひを』と云ふのがある。此の神、これが彼の拜む根本神である。而して高、神兩產靈神は天地萬物を創造し、人間に至善の靈性を賦與する神と爲せる點は、忌部正通や玉木政英と同一說である。彼の著『古道大意』を見ると、產靈の神に關して、『唐の古傳に此神の事を上帝とも天帝とも或は旻天とも名け奉りて』云々と言ひ、『天竺の古傳には大梵自在天王と稱し天地萬物人間も皆此の神の造つたもの』と言ひ、更に『天竺より遙か西の方にも幾らとなく國があつて、其國々もそれ〴〵天つ神の、天地を始め人又萬物をお造りなされたと云ふ傳が各々有る。是も阿爾陀の書物を見るとよく知られるで御座る』と。

彼の著『本敎外編』には

『天地萬物に大元高祖あり、御名を天御中主神と申す。始なく終なく、天上に坐まし、天地萬物の生すべき德を蘊し爲す事なく寂然として萬物を主宰し給ふ、次に高神產靈神あり、天御

中主の神の神德を持ち分けて（此二柱の神の產靈（むすび）の元ッ祖（おや）を申す時は天之御中主神に座すなり）天地萬物を生じ天地萬物を主宰し給ふ』

と言へるは三位一體論ではないか、されど彼は此の高、神の兩產靈神を男女と爲し、陰陽說より脫し得ざる傳統思想に囚はれ居れるは不思議と謂ふべきである。

平田の後に出た南里有隣は、大藝能ある魂が此の宇宙を造つた。其魂は卽ち天御中主神である、最尊最貴、在ますゝる所なく、全智全能、完全無缺にして萬物の主なり、彼の著神理十要は有名な『天道溯源』の抄錄で、基督敎用語を神道用語に書き換へたものと謂はれて居る（村岡博士『日本思想史研究』に由る）

六　明治以後の神道論

＝新しい光＝『基督敎日本神學』＝

明治維新は王政復古と共に、祭政一致の太古に國を引還へさんとした運動でもあつた。勤王思想と共に神道思想が强く働いた運動であつた。勿論祭政一致は神道者流の夢想に過ぎずして時代は彼等を取り遺して進んだ。されど其の保守思想は、屢々頭を持ち上げ保守的政治運動は彼等神道思想家により鼓吹せられた。從て明治に於ける神道は一種保守的愛國運動に過ぎぬ感があつた。宗敎思想として注意するに値するものは殆んど無かつたと謂つてもよい。明治十年頃に田中智邦と云ふ人の書いたものゝうちに

『天御中主神は無始無終、全智全能の神にして在ますゝる所なく至らざる所なし、萬物大は日月星辰より小は虫魚草木皆此神の造化によらざるものなく、世界萬國の人類は悉く此の神の子孫である。

と云へる一段と進んだ一神敎的神觀を述べて居るが、之は恐らく平田等の傳へた神觀を根據と

した思想が、基督教の思想に感化せられて其の色揚げをしたものでないかと思ふ。

徳川時代に儒教思想に反動して復古神道が起つた樣に、明治の泰西思想の爛熟するに方つて其の反動として神道は時代の新しい衣裳を着けて再現するに至つた。明治四十年頃から哲學によりて裏付けられた神道著書が出現する樣になつた。田中博士の『神道本義』や井上博士の『國民道德論』もそれであるが、一番世間の注意を引いたのは筧博士の『古神道大義』であつたらう。筧博士の神觀によると

『神は多神にして一神、一神にして多神、一神多神に拘泥した觀念を超越した存在である』と言ひ、唯一絶對の大生命を認める點に於ては一神教的であり、其の表現神として八百萬神の存在を認めるのは多神教的であるが、其の大生命は天地に遍滿せる普遍的大生命にして、各自の外に超越せる存在であると共に亦天地萬物に滿てる普遍我であると唱ふる所から見ると汎神教的でもある。而して其の絶對の大生命と云ふのは卽ち天御中主神であると言ひ、其の屬性を說いて天御中主神は在ますゝる所なく、表現せざる物なし、而も此神は『唯有る』に非ず『有るが故に有らしめ』『有らしむるが故に有る』神である。此の『有らしむる』のは、卽ち高神兩產靈神で、『有る』神なる天御中主神と共に三位一體の單一神であると言ひ、人間の方より云へば超越神であると共に、各個人に內在せる神であるなど云へる點は、ヨハネ神學を聽くの想もする。所が彼によれば此世界を創造したのは、伊邪那岐、伊邪那美の二神であると云ふ事になつて居る。伯家神道、吉川惟足、玉木政英、平田篤胤等が岐美兩神を人體の神、人間の始祖となせる方がモツト筋が通る。されど彼の中心神觀の、三位一體の絶對單一の大生命である一神思想より脫却し得ないのは、結局神道神觀も最後の落付は、不純な思想を拂ひ潔めて純粹なる一神說に歸一統一し行きつゝあることを此所でも示して居るのではないのか。勿論今日の基督教の神觀、基督教の神學でも無缺とは言はれぬ、今後或は日本思想によりて『新しい光』を得、爰に『基督教日本神學』を樹立することなしと誰が言ひ得よう。

七　唯一神觀と神代の諸神

＝現身神と神子受肉の思想＝

斯うした一神數的神觀を以て、日本の古典、古事記や、日本書紀を見る時、所謂地神なるものは別として所謂天神、即ち別天神五柱、天神七柱と云ふ此の多神的神々を如何に解釋し得るかと云ふ事になる。

民族の宗教意識を透見し得ざる唯物的思想に支配せられる傾向のある歴史家は、日本の神代記を單純なる神話となし、その神話の中より歴史を引き出さんとし、天御中主神さへも一英雄の主權者となし、高御產靈、神產靈の兩神を左右の大臣であつたらうと想像して、それで古典の秘密神話が全く解釋せられたなどと得意になつて居る學者もあるやうだが、全く笑ふべき謬見、淺薄取に足らざる憶說と云ふの外はないのである。

別天神五柱の內、所謂『造化三神』即ち天御中主神、高御產靈神、神產靈神の三神の事は既に詳說した通り、三神一體無始無終の唯一神であつた。他の二柱は即ち宇麻志阿斯訶備比古遲神と天之常立神。此の宇麻志阿斯訶備比古遲とは萬物出現萌芽の意味で、時間、空間の太虛の中に造化神の創造的生命動き始めたる其の事實を神の名を以て人格化したもの。次の天之常立神とは、斯くして天に創造神の確立せることを人格化して、神の名にて示せるものであることが想はせられる。舊約書創世記に『地は定形無く曠空うして』と云つた形容詞と古事記の『國稚く浮脂の如くして海月の如く漂へる時』と云へる形容詞とはよく相似て居る。玆に造化三神一體の存在を前提として其の大生命の動きを想ひ、その動きに對し『美し生命の萌芽』(宇麻志葦芽)の神と呼び驚異嘆美の念を天地の造主なる神の其の創造的神力に馳せたであらう。

勿論、宇麻志阿斯訶備比古遲神も、天之國常立神も、造化神の大生命の動きそのものであるから其所に見るべき形はない筈である。古事記が此二柱の神をも『身を隱し給ひき』と云へるは、よく眞實に徹せる言であらねばならぬ。次の神世時代の中、最初の國常立神と豐雲野神とは、國土創造の意志と、その意志によりて成れる國土は、豐なる萬象雲生のその盛なる狀態を人格化したもので、これとて抽象的狀勢を人格化したものであつて見るべき形のものではない同しく『身を隱し給ひき』の言が當嵌るべき筋合である。次の宇比地邇神、須比智邇神、日本

書記には宇比地を盪土、須比智を沙土と漢譯してある。創世記に『神言ひけるに……乾ける土顯るへしと、卽ち斯くなりぬ』と記せるとよく似て居る。其他角杙、活角杙の神は萬物生成の事實を、意富斗能地、意富斗邊の神は生物發生の事實を、游母陀流神は萬物足り滿つる事實を神格化し、阿夜訶志古泥の神は、嗚呼惶き哉と、天地創造の大業に顯はれたる其の榮光其の稜威を嘆美せるの外なき天地の心を神格化したので、創世紀の天地創造の文に『神之を善しと觀給へり』と云へる一句の心に相當するのではないか。

我等の祖先は是等の事實はそれ自身發生し存在せるものにあらずして、天地の創造者たる唯一神の各表現に過ぎぬと見たのでないか。但しこれは大和民族の抑々元始からの神に對する觀方であつたのか。それとも更に溯つてズットの太古天孫民族の神觀は、三神一體の唯一神天御中主神をのみ單純に拜したものであるか。今の處それ迄溯ほり得る何等の記錄も傳へもない。

玆に天地成りて人之に住ふに適する事となつた。人體を取つた伊邪那岐、伊邪那美二神出現したと云ふのである。萬物成りて、新約聖書に人類の系統を溯り、平田篤胤の所謂『世々の祖、おやの御祖の神』に到着し「アダムは神の子なり』と云ふ人類の始祖出現の記錄と酷た似て居る。

要するに造化三神以下の諸神は、天地出現の順序を神の御名を以て言ひ顯はしたものと見られ得る。天地創造の不思議なる現象は、神の意志の發展であつて、それ〳〵の現象の中に神その者を表現せしめ、それを直に神と呼ぶ事も、解釋の仕樣によりては、必しも不合理とも言はれ得ないことを感ぜざるを得ない。斯く解し來れば、別天神五柱神世七代七柱の神、必しも一神教的解釋の妨げとはならぬと思ふ。

爰に言つて置きたいのは、神道では重要な中心信仰の一つである。古典を見ると、靈なる隱れ身至つたことである。これ神道では重要な中心信仰の一つである。靈なる存在者が人體の形を取るにの神の先祖から、何時しか現身神、明津神が出現して居られる、山崎闇齋の所謂『身化の神』、何うしてそんな事が在り得るかと怪しみ疑を挿まねばならぬ筈である。我等の先祖は此れに對して少しも疑を抱いて居なかつた樣である。疑を抱いて居ないのみならず、『だから日本は神の國である、日本人は神の子孫であるから尊いのである』と誇つて居るのである。既に度々言つた樣に、神道では『太極』とか『天』とか『理』とか『道』とか、或は『眞如』とか、そん

な空なるものは眞なものではない、事實をのみ眞とする。神看念でも、活きた人格的神を持て來なければ板に着かぬ、靈なる神、『身を隱し給ひき』の神丈けでは何うしても承知が出來ない、現實肉身の神を得ざれば止まない、『知られざる神』『絶對他者』では滿足が出來ない『言、肉體となりて吾等の間に宿り給へる』現實の體を得ずしては滿足が出來ないと云ふ眞理の根本的要素が我が神道にもあるのである。さればこそ伊邪那岐、伊邪那美の二神天神の御子として肉身を以て出現し給ひ、爰に史的實在の神が示されたと云ふことになる。井上哲次郎博士の『神道は神人教で、人と神との間は判然たる區別が設けない宗教、神は皆人として表象せられ人は神の系統を引いたものである。言ひ換へれば人は神の子孫である。神の人であると同時に人も神である、現身神と云ふのがそれである』と言つて居る。筧博士も『神自ら人間たる方面を有せらるゝ事は神道の特長である』と云ひ、『神と人とは父子の關係で人は神の子である』と云ふのも此の意味で、結局『肉となれる神』なくしては納りがつかないのである。爰にインカアネーションの思想を想ひ起させる。西洋の或る學者が『神の子受肉のイエスを缺く事が凡ゆる受造物の惱みである』と言つた事を想起して意味深き事を思はせられる。現身神なくしては

神看念は詰論を得られぬ事になる。

此の現身神の思想は神子受肉の眞理を暗示するもので、『言、肉體となりて我等の中に宿り給へり。我等其の榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして恩惠と眞理とにて滿てり』と云へるヨハネの思想と信仰の理論は、我が大和民族信仰思想の中にも豐に培はれつゝあるのであるされば神子受肉と云へる、基督教の中心信仰にして又根本思想と、神道の『現身神』の思想とは、理論としては或點迄一致し居る事寧ろ不思義とせねばならぬ、但し支那でも帝王の本生を神に求めた、例へば殷の祖后稷は天帝の子孫であると說く類であるが、其の說の吾等に與へる觸感は神道の現身神の信仰とは大分相違のある事を感する。

イエス言ひ給ふ『汝等の見る所を見る眼は幸福なり、われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見る所を見んと欲したれど見ず、汝等の聞く所を聞かんと欲したれども聞かざりき』。

現身受肉の神こそ、預言者も、聖者も、凡人も、世界人類の齊しく見んと欲し聞かんと欲した其の神ではないか。

八　神道と儒教及老子

＝神道に於ける天啓思想＝

以上我等の祖先の神觀を繹ね、唯一神教的信仰が其の根本となつて居る事を述べたが、斯うした神觀から流れ出た『神道』とは何う云ふ道を謂ふのか、既に述べた通り『惟神者謂『隨三神道』亦自有乙神道『也』で、文字で定議を下す樣なキャテゴリカルな信條と謂つた樣なものがある譯ではない、だから玆に『自ら』昔より有るのぢやと謂ふのである。卽ち立敎の聖人なく開宗の祖師なく、成文の經典なく、神代の神々から傳はつた生活の原理、否生活そのものであると言ふのである。名法要集の『天地を以て書籍となし日月を以て證明となす』と云ふ文句も此所から出て來るのである。

然らば其の神代の生活とは何んなものかと問へば、具體的に指示する事は難しい、『神ながら自然の道』と云ふの外はない。神道五部書には『神代の人は聖、地神の末となつて人心は黑し、されば神代の昔に還り神の心を心とする樣になるのが神道である』と云ひ、伊勢神道の渡會常彰はそれを說明して『神道は開闢自然の道、神代の神道卽ち人世の神道』なりと言つた。『中庸』の所謂『道』と云ふのと何處が違ふのかと言つてみたくなる。吉田兼倶は『神とは天地に先ち、天地に在つては之を神と謂ひ、萬物に在つては之を靈と云ひ、人に在つては之を心と云ふ。心とは神也、故に神道とは心を守るの道なり』と言つた。之は王陽明の『致知』の說と甚だ似た所がある。所謂『天植の靈根』、道卽ち性、性卽ち天之命である。カントの所謂天命的意識と言ふのと似て居る。之を明にし之を守るのが神道でありとせば、是は何も日本特有のものではない。だから德川時代の儒者の連中は神道も矢張り儒道であると唱へた。『天の命之を性と謂ひ性に率ふ之を道と謂ふ』と云へる儒道哲學其儘で、神道を說明する事も出來る。

されば大宰春臺は、其著『辯道書』に『聖人神道を以て敎を設く而して天下服す』と云ふ易經の句を引き、天の神道とは凡て天地間にある事の、人力の所爲でないものは神の所爲であつて、萬物の造化之より起り、之を以て成就するを天の神道と謂ふ、されば神道は我が國獨特の道でなく、聖人の道の中にあるのであると說き、春臺の先生であつた物徂徠は、『古より聖帝明王皆天に從つて天下を治め、天道を奉じて政を行ふ、之を以て聖人の道六經に載する所皆天

を敬するに歸せざるなし、是れ聖門の第一義也」と言つた。神道の所謂「開闢自然の道」と云へるのは儒教の云ふ「道」と異なる所はない樣に思はれる。所が復古神道の連中に言はしむると、儒教と神道とは全然別物であることを强辯して其の鼻息は却々烈しい。復古神道の尖頭に立つて居る荷田春滿は、「從來の神道は唐宋諸儒の糟粕を嘗むるものに非らざれば胎金兩部の餘瀝である」と言つて、先づ排斥の聲を揚げ、加茂眞淵は日本國民の先祖の生活振りそのものが國意であり古道であり古神道である、神道とは我等の祖先の生活したその儘の道で、人智を用ひて作爲した儒道とは異り、「我國は外國の如く細かく規則理窟に支配せらるゝことなくして唯天地の心のまに〳〵治め給ふを以て古道とす」と言つて居るが。斯く言へば、儒に反對した老子の說に似た所がある。さればこそ眞淵は「老子の天地のまに〳〵と言はれしことこそ天が下の道には叶ひはべるめれ」と言はざるを得なくなり、全然老子の徒となつて老子の糟粕を嘗むる形となつた。日本書紀、齋明紀に、博德と云ふのが、唐の天子の日本の國情を問はるゝに答へて、「天地合德自得二平安一治稱二天地一萬民無事」と言つたのを「これこそ我國の大道を言ひしなり」と稱讚したのに眞淵の神道觀はよく判かる。彼は自然哲學者であつて、本統の意味に於て有神論者だとは認め難い點がある。

本居宣長は猛烈に儒佛老等外國の思想を一から十迄攻擊し、第一、日本書紀は漢意によりて曲げられた漢文記錄で眞の神道の面目は古事記に於て之を見ると主張し、山崎闇齋の神道說の如きは神道の名を藉つて儒を說くものだと排斥した、彼曰く

「古の大御代には道と云ふ言葉は無かつた、何の道くれの道と云ふ事は異國の沙汰なり、抑々此の天地の間にありとあらゆる事は悉皆神の御心なり、此の道は異國の萬の道に勝れて正しく高き貴き道である。（直毘靈）

と言ひ、神道は小慧しき人の作爲した敎ではない、卽ち

「隨神（カンナガラ）の道で、隨神とは神代よりありとしまに〳〵ものし給ひて、いさゝかもさかしらを加へ給ふことなきを云ふ、大らかに知らしめせば自ら神の道に適ふ」

宣長の言ふ所も、儒敎『中庸』の道や、若くは老子の自然の道と何處が異るのかを怪しむ。所が宣長は之れを說明して、老子の自然の道は小慧しき人爲的『敎』に反對して出來た人爲的『自然の道』で、神道とは異ると主張する、彼曰く

「此道は如何なる道ぞと尋ぬるに、天地の自づからなる道にも非ず、人の作れる道にもあらず、此道は畏しや高御産靈神の御靈によつて神祖伊邪那岐、伊邪那美の大神の始め給ひて、天照大神の受け給ひ保ち給ひ傳へ給ひたる道なり、故に之を神の道とは申すぞかし」

と説明して居る、即ち老子の言ふ自然の道でもなければ、人の作れる儒の道でも無い、日本の神々によりて始められた道、高御産靈の神によりて啓示せられ、人となり給ふた伊邪那岐、伊邪那美の神から天照大神へと承け繼がれ、神武天皇より代々の天皇に傳へられた道である、人間の作つた道や、あり來たりの自然の道と云つた樣なそんな安價なものではないと云ふのである。

人間本然の性にのみよりて知り得ざる道、在りのまゝなる人間その者の智能にては知り得ず達し得ざる道、神によりて始めて敎へられ、示された道だと言ふのである。復古神道には一種天啓思想が其の中心を成して居ることは、我等の不思議とせざるを得ない所である。此點に於ても天啓を說く基督敎の反對の側に立つべき神道ではないのである。

九　神ながらの道と「先王之道」

＝神道は現世主義、現實主義＝

平田篤胤は宣長の後繼者を以て任じて居たが神道に關する觀方は一寸異つて居る樣である。彼も極力儒佛を排斥したが博學多識丈けに、何うしても其の多識から脫し得ず、儒、佛、道を排しながら、尙ほ其の說を取り入れずには居られなかつた。太宰春臺が易經を引いて神道は我國獨特の道でないと云へるに對して、易の所謂「神道」なるものは自然の運行を謂ふものであつて、日本の神道とは異う。日本の神道とは實在の神があつて其神のなされる道と云ふ事である。全然根本的に相違して居ると反駁して居る。彼も宣長と同樣に、「神道」は天神から傳はつた道だと云ふことを高調して居るが、宣長は老子を排したに拘はらず、篤胤は、老子の「自然の道」と「神ながらの道」とは異なる所なしとし、儒敎に對しても吾々とても神の產靈の御靈によりて生れ出たもの故、各々自ら神の道ありて、儒敎の所謂五倫五常の道は生れながらに具つて居る故、曲げずゆがめず隨ふて行くを神ながらの道と謂ふと言ひ、「其の元は皇產靈神

の御靈によりて出來る人ちやに因つて、其の眞の情も直に產靈神の御賦與なされたもので、夫れ故に是を性と云ふて御座る」と言つて居る。彼によれば神道は日本の神々の實際生活によりて特に啓示せられた道ではあるが之は老子の「道」とも異なりはしない。儒敎の五常五倫の道にも合すると云ふのである。されど、彼は、神道は「敎」ではない、神々の生活そのものであることを高調して曰く

古、儒佛の道未だ我國へ渡り來らざる以前、純粹な古の意と古の言とを以て、天地の初めより事實の上に眞の道の具はりある事を明にす、眞の道と云ふは事實の上に具つて居るのである、然るに世の學者などは盡く敎訓と云ふ事を記した書籍でなくば、道は得られぬと思ふて居る者が多いがそれは甚だ心得違ひで、敎と申すものは事實よりも甚だ下い物である、されば事實があれば敎は入らぬ、道の事實がなき故に敎と云ふ事が起る。

神道は「敎」でなく事實である、神の國高天原から移し植えられた生活其のものであると云ふのが宣長と共に彼の强く主張する所で、隨つて彼に於て注意すべき一事は、高天原の實在を信じて居た事である。彼は高天原を說明して、高天原とは「天ツ神の坐す御國なるが故に山川草木のたぐひ宮殿、其外萬の物も事も全く皇美麻命（スメラミマノミコト）の所知（シラシ）看す此國の如くにしてなほ勝れた所である」と言へるのは、スエデンボルグ其のまゝである。

一體神道は現世主義現實主義である、現世主義現實主義と云ふよりも、神道には過去と未來とが無いと謂つてよい、其の過去と云ひ未來と云ふのも現在と云ふものゝ單なる延長に過ぎない、佛敎の樣に、現實にあらざる本來の面目と云ふものを過去に有せない。佛敎では、實在と云ふものは「空」「無」の過去にあつて、現在を否定し、「空」「無」の本來過去に自己をも萬有をも沒入して了まつて人格發展の前途に創造の新天地を有しない。佛敎哲學中の諸法實相觀と云ふのも、柳は綠花は紅なる現實を何うすることも出來ず、是に於て時間空間、一切を超越した空無の中に含められた現在にのみ諸法實相を認めるのであつて、現在と云ふものを獨立して認めるのではない。神道では現在が一切であり、諸法實相それ自身實在である、基督敎の樣に未來に創造の新なる世界を有せない。換言せば、現實其儘が人間其の者の本來の面目であつて有りのまゝの現在人間が人間の眞實である。のみならず、萬有そのものも現在其のまゝが實在である。其の外には實在はないと謂つてよい。現世と冥府（ヨフレゴト）、現事と幽事（カクレゴト）とは現在の表裏に過ぎ

ず、高天原と皇美麻命の所知す此國とは現在の彼方此方に過ぎぬと見てよいと思ふ。

而して此の高天原延長の神道生活は、佛教や、儒教や、道教やの教が這入つて亂だされ曲げられたのであるから、宜しくこの古への實生活に還へらなければならぬと云ふのが復古神道の根本主張である。

復た神道の言ふ所は、孔子の所謂『先王之道』と云ふ事とよく似た所がある。日本の儒家にも、德川時代當時の御用儒道朱子學に反對して古學を唱へ、朱子學は古への儒道ではないと唱へたのに二流あつた。一つは伊藤仁齋で、天道即ち本然の道を生活に實現爲さうと云ふ事が孔孟の古意であつて、仁こそ本然の道である、此の仁の實行生活が儒道であつて朱子學の如き窮理工夫の空理教ではないと言ふので、老子の言ふ自然の道とは異うが、神ながらの自然の道と云ふ復古神道家の主張と好く似て居る。今一つは荻生徂徠であつて、朱子の理氣哲學は後世老佛の思想が雜つたもので儒學の眞面目ではない。孔子の所謂『先王之道』とは唐虞三代の明王が、天命にとりて天下の王となり、天下を安んずるの道を立てた。これが即ち六經に示された聖王作爲の文化である。この先王の道を明にするのが儒教であると唱へた。積極的に制度典章

燦然たる人文建立の主張である。されど此の聖王作意の文化は天之命、天意を背負ふた人間の努力作爲の所產であるとせば、何も根本に於て本然の道を離れた人間作爲の生活とは謂はれぬモーゼの律法的建國に於て彼の叡智を通じて天意を見ることの出來るのと同樣で、天意を外にして本統の意味に於ける自然はない筈である。

要するに神道とは、神ながら、神の御心のまゝの生活、この手本は古の神々の生活を生活する事で、その生活を知るには『神代記を素讀する外なく讀書百遍意自ら通す』と伯家神道の森昌胤が說明して居る語より外に說明の爲やうがない。言ひ換ゆれば結局『神道』は『教』の宗教でないが、大和民族の祖先が天地の大生命に隨ふて生活したその生活を生活する事であると云ふのに歸着するのではないか。

十　祭神の古道＝原始宗教意識に還れ

＝神國のヴヰジョン―『世々隱れたる神の奥儀の經綸』

日本歴史―日本書記―の初頁に、神武天皇が、天ッ神の使命を帶び、大和の國を平定し、其の所謂天業恢弘の活動一段落を告げ、功を定め賞を行ひ給ふた時、詔して

『我が皇祖の靈、天より降り鑒りて朕が身を光し助け給へり、今諸虜已に平き四海無事なり以て天神を郊祀り用て大孝を申ふべきなりと。乃ち靈時を鳥見の山中に立て以て皇祖天神を祭り給ふ』。

此の詔のうちに日本人の祭神の根本義が明に示されて居ると思ふ。

天神を祭りて大孝を申ふと云ふこと、之が日本神道の根本義でもあり、日本精神の淵源でもあると信ずる。

爰に『マツリ』と云ふ語に漢字の『郊祀』と云ふ文字を用ひて『祭り』の種類方法を示してある點に注意すべきでないかと思ふ。『郊』と云ふに野外に祭壇を設けて上帝を祭ることを意味

した文字である。古語拾遺には此の所を『禋祀皇天』と書いてある。『禋』と云ふのも上帝を祀ることを意味した文字である。又『マツリノニハ』には漢字『靈時』が當て嵌められて居る。『時』とは野外に設けた祭壇の事である。舊約聖書創世記に、アブラハムがカナンの地に入りマムレの橡林に祭壇を設けて天神エホバを祭つた記事を想起す。アブラハムはマムレの橡の林に靈時を立て以て天神を祭つたのである。本居宣長など、古學派の人に言はしむれば、漢文字を用ゆるから不可んと曰ふかも知れないが、爰に單に『祭』の文字を用ひず、其の内容の意味に當て嵌つた漢文字を使つた所に著者の用意があつたかとの想もするのである。

平田篤胤の所謂『世々の祖、おやの御祖の神』なる天神に大孝を捧げると云ふことは、基督教の孝道―父なる天ツ神に大孝を申へる基督教の孝道と相一致するものあるを思ふ。勿論、これは元始的な宗教意識であるから、今日の基督教會の禮拜内容と同じとは言へない。中江藤樹の言に從へは『孝は天地未劃の前の神道なり』である。基督教では人と人の關係、即ち人間同士親子の關係に於てのみならず、神自身の内に父子の孝道存すと爲す、祭神の根本義に於て日本の古道は、基督教と酷似したるものであることを見る。『アブラハム神を信ず』其のアブラ

ハムの元始的な宗教意識には、神學があつた譯でもなく、哲學があつた譯でもない。大空の星を仰ぎ、天の啓示によつて、其所に、はツきりと天神の存在を意識したのである。『アブラハム神を信ず』と云へる此の創世記の文句と日本書記の『高天原にあれましゝ神の御名は天御中主尊』と云ふ文句とを比較すると、只單に表現の仕方が異ふ位の事ではないのか。

日本人は、先づ此の古道―醇粹なる元始宗教意識に還へるべきである。而る後今日の宗教を見直し、更に自己自身の宗教を見直すべきではないが。

最後に一言する。神道家の人々は、日本は神國で、神から承け繼いだ國、天津神の直接創め給ふた國で、世界萬國の本家本元であると稱する。

『我國は諸洲の根本なれば萬物の氣化も神明の出現我國を始めとする事更に疑ひなく、日本より起りて震旦、天竺と開け行きて四方成就して天地は固まる云々』（吉川惟足）

日本は根本で、支那は枝葉、天竺は花實、儒教も佛教も神道の分派だとは吉田神道の主張である。此思想は神道家を一貫して居るが、篤胤の如きは之を强調して『日本は萬國の祖國で天皇は萬國を知らす大君で、古學は萬國の本ッ學びたる事を辨ふべし』と言つて居る、而して佛

の本地垂跡を逆にして、日本が本地で萬國に垂跡し、支那の古傳の上帝、天帝も、天竺の梵天大王も、西洋の天地創造神も、日本の神の異名で遠く訛傳したものであつて出所は日本からである。日本と云ふ國の本は高天原に實在して居る。其國振りを此葦原の國に移したのが即日本の國で、これが萬國の始で本家である。そこで此の神國を此の葦原の國許りでなく世界に打ち立つるのが日本の使命で、此の神國を擴張して世界全體を神國とせねばならぬ、されば日本國民は私を棄て全人類の幸福の爲めに奉仕せねばならぬ。と云ふのが日本神道の抱負である。『聖國を來らせ給へ』と云ふ基督者の祈りと心持は相通ずる。眞の意味に於ける『神國』を世界に立つる事は基督者の使命であると共に亦眞に自覺せる日本の使命であらねばならぬ。

吾等は玆に我三千年の歷史に於ける舊約の完ふせらるゝ日の來る事を祈らねばならぬ。吾等は玆に我國の上に新約聖書エペソ書の所謂『世々隱れたる神の奧儀の經綸』を觀し、正しき眞の神觀に立ち『言』の啓示に隨ひ日本の前途に大なるヴヰジョンを望見する次第である。

福音新報

教派の如何を問はず、全基督教界の大勢と其の主流と各教派の動向を知らんとせらるゝ諸氏は是非本誌を購讀せられんことを乞ふ。

週刊＝毎木曜日發行

△購讀料金（前金）

	內地	外國行
一部	金九錢（郵稅五厘）	金九錢（郵稅二錢）
三ヶ月	金一圓廿錢（郵稅共）	金壹圓四十錢（郵稅共）
六ヶ月	金二圓卅五錢（郵稅共）	金貳圓七十四錢（郵稅共）
一ヶ年	金四圓五十錢（郵稅共）	金五圓廿八錢（郵稅共）

△廣告料（前金）

一行　金卅五錢　同指定　金四十五錢
半段　金三圓　一段　金六圓　一頁　金三十圓
廣告締切は前週土曜日

發行所　東京市世田谷區代田一ノ三六四　福音新報社　振替東京二六八六三番　電話松澤二四〇三番

昭和九年十二月十三日印刷
昭和九年十二月十四日發行
昭和十年四月十五日第二版發行
昭和十一年十一月廿七日第三版發行

（定價金二十錢）
送料金二錢

著者　東京市世田谷區代田一丁目六三四番地　原戊吉

發行所　東京市世田谷區代田一丁目六三四番地　福音新報社　電話松澤二四〇三番　振替東京二六八六三番

印刷人　東京市牛込區新小川町二丁目八番地　齋藤權

印刷所　東京市牛込區新小川町二丁目八番地　昭和印刷所　電話牛込六五二番

330
602

終